

きょうげん
狂言 かんしょう
鑑賞のために

おおくらりゅう やまもとかい
大蔵流 山本会

きょうげん あゆ
狂言の歩み

狂言は、室町時代の昔から今日まで、六百年も続いた
 芸能です。ごく初期には、農作業の節目に、神社の祭礼
 に、市の立つところに、人々が集まって即興的に行われて
 いた、とても素朴な寸劇でし
 た。そのうち、面白いもの、
 人々の心に残ったものなどが
 繰り返し行われるうちに、だん
 だんと形づくられました。まとめ
 ていった人は、玄恵法印という
 お坊さんだといわれています。
 江戸時代になると、幕府は
 能楽を式楽（正式な儀式で



使う音楽)にしました。それからは、能と狂言が一番として
 能舞台で演じられるようになり、狂言師たちは禄（給料）を
 与えられ、専門家として代々厳しい修行が課せられました。
 明治時代になると式楽とし
 ての位置づけはなくなりました
 が、厳しい稽古を重ねて芸を
 伝えていく伝統は守られ、
 今日では世界的に見ても
 貴重な芸能として、能とともに
 ユネスコの世界無形遺産に
 認定されています。

きょうげん
狂言とは

狂言には、歴史上有名な人や、特定の人物は出てきません。私たちの
 身近にいるような人ばかりで、内容も日常よくあるものです。登場人物は
 大名（主人。地方の小領主、農村に土着した武士）、太郎冠者（従者。
 召使）、夫、妻、山伏、僧、動物などです。
 狂言は見て楽しむものです。面白いと思ったら大いに笑い、へんだなど
 思ったら大いに考えてください。



じぎょうめい れいわにねんど ぶん かげいじゆつ こどもいくせいそうごうじぎょう じゅんかいこうえんじぎょう
事業名-----令和二年度 **文化芸術による子供育成総合事業** -----巡回公演事業-----

こうえんだんたいめい おおくらりゅうきょうげん やまもとかい
公演団体名-----大蔵流狂言 山本会

こうえんしゆもく きょうげんこうえん
公演種目-----狂言公演

じぎょうがいよう ぶん かげいじゆつ こどもいくせいそうごうじぎょう じゅんかいこうえんじぎょう
事業概要-----文化芸術による子供育成総合事業-----巡回公演事業-----

我が国の一流の文化芸術団体が、小学校・中学校等において公演し、子供たちが優れた舞台芸術を鑑賞する
 機会を得ることにより、子供たちの発想力やコミュニケーション能力の育成、将来の芸術家の育成や国民の芸術鑑賞
 能力につなげることを目的としています。

事前のワークショップでは、子供たちに実演指導又は鑑賞指導を行います。また、実演では、できるだけ子供たちにも
 参加してもらいます。

演目

[附子] ぶす

主人は外出するにあたって、二人の召使、太郎冠者と次郎冠者に大切な品物をあずけました。主人が言うには、その品物は附子というもので、その方向から吹いてくる風に



毒。でも太郎冠者は中身を見たくてたまりません。そこで二人は風が吹いてこないように扇であおぎながらふたを開けることにしました。そこで見たものはおいしそうな黒砂糖。忠実な召使に嘘までついて出かけた主人への不満もあつたのでしょう。二人は黒砂糖をぜんぶ食べてしまいました。さあ、そろそろ主人が戻ってくる時間。このままではひどく叱られてしまうのは目に見えています。そこで太郎冠者は一計を案じました。

[解説]

当時、砂糖はたいへんな貴重品でした。主人はこっそり自分だけで食べようとして、嘘までついて出かけたのでしょうか。主人の弱みをついた太郎冠者。なんて知恵の働く召使でしょう。

[蝸牛] かぎゅう

蝸牛とはカタツムリのこと。山伏がやぶの中でひと寝入りしているところへ、太郎冠者がやってきました。主人に大きなカタツムリを取ってこいと命じられたからです。でも太郎冠者はカタツムリがどんなものか知りません。主人の説明では「やぶに住んで、頭が黒く、腰に貝をつけていて、ときどき角を出す」のがカタツムリということです。そこで山伏に「あなたがカ



タツムリか」と問いかけました。いっぽう山伏は、太郎冠者からかってやろうと、自分がどれほどカタツムリの特徴を持っているかを説明します。すっかり信じ込んだ太郎冠者。山伏に教えてもらった愉快な謡を二人で謡って楽しんでいました。そこへ、太郎冠者の帰りが遅いので、主人が捜しにきたのですが。

[解説]

カタツムリは寿命を延ばす薬だと思われていたのでしょう。主人は祖父にカタツムリを差し上げるつもりでした。さて、太郎冠者はどうして山伏がカタツムリだと思い込んだのでしょうか。

巧みな言葉で証拠を見せていく山伏はみごとですね。三人が浮かれながら謡う謡は「雨も風も吹かぬに、出ぎ釜打ち割ろう」。「天気がいいのに殻から出てこなければ、殻を打ち割るよ」の意味です。

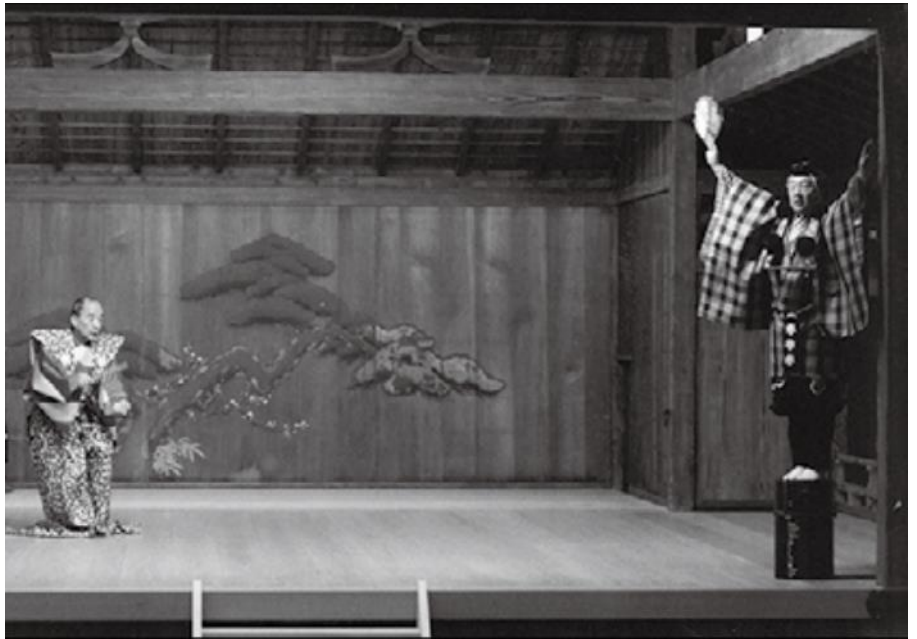
演目

[柿山伏] かきやまぶし

おおみねさん、かつらぎさん、しゆぎよう、お
 大峰山と葛城山で修行を終えたばかりの山伏が、出羽の羽黒山へ帰る途中のこと。お腹がすいてふと見ると、みごとな柿の木があります。山伏は勝手に木に登って柿を食べはじめました。そこへやってきた柿の木の持ち主。上から飛んできた柿の種に気づいて見上げると、なんと山伏が大切な柿を盗み食いしているではありませんか。さてどうやって懲らしめてやろうか。あれはカラスに違いないと、カラスの鳴きまねをさせます。一生懸命に鳴きまねをする山伏。次はサル、次はトビ。柿の持ち主は「トビなら飛びそうなものだ」とはやし立てます。山伏も決心をして、高い木のうえから「ヒー、ヨロ、ヨロ」と飛んだのですが。

[解説]

修行を積んだ山伏は、普通の人では持ち得ない能力(法力)を持っていると考えられていました。そんな山伏で



も、お腹がすくと人のものを盗み食いするものなのです。トビのまねをして柿の木から落ちてしまった山伏。柿の持ち主に、「家まで背負って行って治療しろ」とおどしますが、結局は背中から振り落とされ、法力の無いことまであからさまになってしまいました。

面と道具



[道具] どうぶ

ほとんどが象徴的なものですが、なかでも、かずら桶というウルシ塗りの桶をよく使います。酒樽、床几(腰掛)、茶壺、そしてときには樹木の役も果たします。また、桶の蓋は酒盛りのときの盃や茶碗にもなります。

[面] おもて

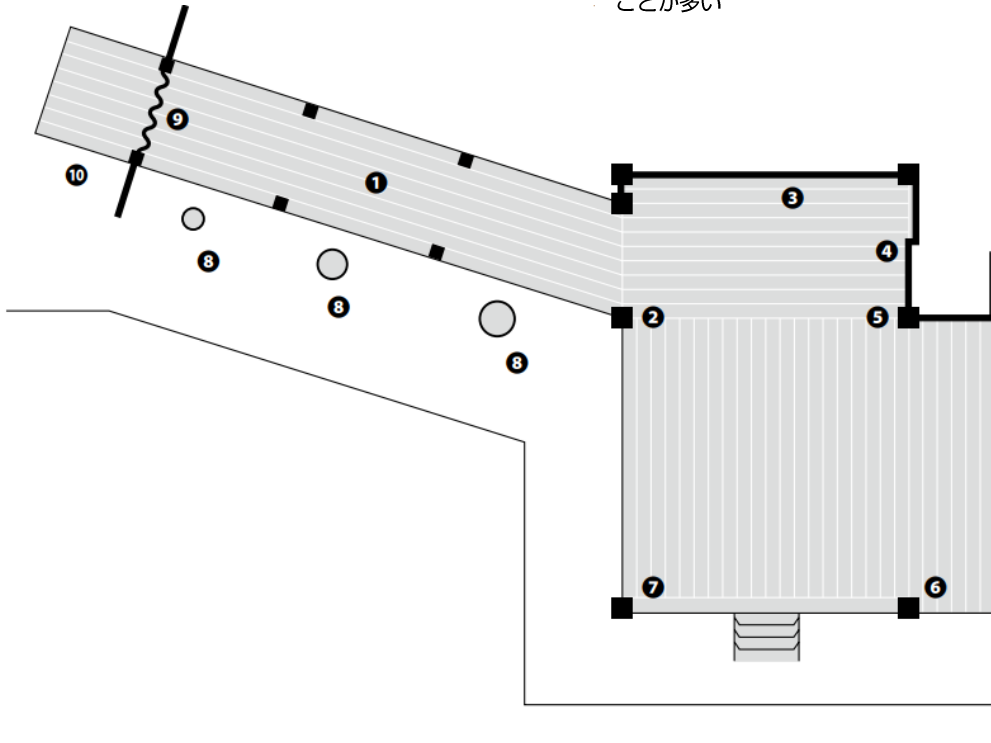
能では面をつけることが大半です。狂言は直面と言って、素顔が大部分ですが、「鬼」「動植物」(狐、狸、猿など)「老人・老女」「神さま」「幽霊」などでは面を使用することがあります。

能舞台を見る

のうぶたい よんぼん はしら さき しかく
 能舞台は、四本の柱に支えられた四角
 な舞台と、橋掛りと呼ばれる廊下のような
 部分からできています。他の演劇のよう
 な部分からできています。他の演劇のよう
 に観客との間に幕がありません。

- ①橋掛り
 演者が出入りする通路であると同時に、舞台の延長としての機能を持つ
- ②シテ柱
 シテ(主役)がこの柱の近くに立つことが多い

- ③鏡板
 老松が大きく描かれている。神が松に宿り、その神に芸能を捧げると伝えられる
- ④切戸口
 地謡や後見の出入りに使う
- ⑤笛柱
 笛方がこの近くに座る
- ⑥ワキ柱
 ワキ(主役の相手)がこの柱のそばに居ることが多い
- ⑦目付柱
 能面をつけ視野が狭くなった演者の目じるしとなる
- ⑧一ノ松・二ノ松・三ノ松
 舞台上に近いほうから一ノ松・二ノ松・三ノ松といい、大きさも順に小さくして遠近感を出している
- ⑨揚幕
 演者の出入りするときには揚げる幕。普段は閉じている
- ⑩鏡の間
 揚幕の奥にある大きな鏡を備えた部屋。演者が最終的な身支度をする



団体紹介

おおくらゆうきょうげん やまもと け むらまちだい はじ きょうげん いま
 大蔵流狂言の山本家は、室町時代に始まった狂言を今
 つた いえがら どうきょう ちゅうしん かつどう えど
 に伝える家柄で、東京を中心に活動しています。江戸
 時代には幕府の正式な儀式の場で狂言を勤めていたの
 かくちょうたか きはく み げいふう も
 で、格調高く、気魄に満ちた芸風を持っています。

メモ欄

こくさいおんがく ひ 「国際音楽の日」 について

知ってますか？
 10月1日は
 「国際音楽の日」です。

1977年にユネスコの要請
 で設立された国際音楽評議会
 という会議で、翌年の1978
 年から毎年10月1日を、世界
 の人々が音楽を通じてお互い
 に仲良くなり交流を深めて
 いくために「国際音楽の日」と
 することにしました。
 日本では、1994年から
 毎年10月1日を「国際音楽の
 日」と定めています。

狂言 鑑賞のために

大蔵流 山本会

狂言の歩み

狂言は、室町時代の昔から今日まで、六百年も続いた芸能です。ごく初期には、農作業の節目に、神社の祭礼に、市の立つところに、人々が集まって即興的に行われていた、とても素朴な寸劇でした。そのうち、面白いもの、人々の心に残ったものなどが繰り返し行われるうちに、だんだんと形づくられました。まとめていった人は、玄恵法印というお坊さんだといわれています。

江戸時代になると、幕府は能楽を式楽（正式な儀式で



使う音楽)にしました。それからは、能と狂言が一番としての能舞台で演じられるようになり、狂言師たちは禄（給料）を与えられ、専門家として代々厳しい修行が課せられました。

明治時代になると式楽としての位置づけはなくなりましたが、厳しい稽古を重ねて芸を伝えていく伝統は守られ、今日では世界的に見ても貴重な芸能として、能とともにユネスコの世界無形遺産に認定されています。

狂言とは

狂言には、歴史上有名な人や、特定の人物は出てきません。私たちの身近にいるような人ばかりで、内容も日常よくあるものです。登場人物は大目（主人。地方の小領主、農村に土着した武士）、太郎冠者（従者。召使）、夫、妻、山伏、僧、動物などです。

狂言は見て楽しむものです。面白いと思ったら大いに笑い、へんだなどと思ったら大いに考えてください。



事業名-----令和二年度 文化芸術による子供育成総合事業 一巡回公演事業一

公演団体名-----大蔵流狂言 山本会

公演種目-----狂言公演

事業概要-----文化芸術による子供育成総合事業一巡回公演事業一

我が国の一流の文化芸術団体が、小学校・中学校等において公演し、子供たちが優れた舞台芸術を鑑賞する機会を得ることにより、子供たちの発想力やコミュニケーション能力の育成、将来の芸術家の育成や国民の芸術鑑賞能力につなげることを目的としています。

事前のワークショップでは、子供たちに実演指導又は鑑賞指導を行います。また、実演では、できるだけ子供たちにも参加してもらいます。

演目

[附子] ぶす

主人は外出するにあたって、二人の召使、太郎冠者と次郎冠者に大切な品物をあずけました。主人が言うには、その品物は附子というもので、その方向から吹いてくる風にあたるだけで人間が消えてなくなってしまうというたいへんな



[蝸牛] かぎゅう

蝸牛とはカタツムリのこと。山伏がやぶの中でひと寝入りしているところへ、太郎冠者がやってきました。主人に大きなカタツムリを取ってこいと命じられたからです。でも太郎冠者はカタツムリがどんなものか知りません。主人の説明では「やぶに住んで、頭が黒く、腰に貝をつけていて、ときどき角を出す」のがカタツムリということです。そこで山伏に「あなたがカ



どく毒。でも太郎冠者は中身を見たくてたまりません。そこで二人は風が吹いてこないように扇であおぎながらふたを開けることにしました。そこで見たものはおいしそうな黒砂糖。忠実な召使に嘘までついて出かけた主人への不満もあつたのでしよう。二人は黒砂糖をぜんぶ食べてしまいました。さあ、そろそろ主人が戻ってくる時間。このままではひどく叱られてしまうのは目に見えています。そこで太郎冠者は一計を案じました。

【解説】

当時、砂糖はたいへんな貴重品でした。主人はこっそり自分だけで食べようとして、嘘までついて出かけたのでしょうか。主人の弱みをついた太郎冠者。なんて知恵の働く召使でしょう。

タツムリか」と問いかけました。いっぽう山伏は、太郎冠者からかってやろうと、自分がどれほどカタツムリの特徴を持っているかを説明します。すっかり信じ込んだ太郎冠者。山伏に教えてもらった愉快な謡を二人で謡って楽しんでいました。そこへ、太郎冠者の帰りが遅いので、主人が捜しにきたのです。

【解説】

カタツムリは寿命を延ばす薬だと思われていたのでしょうか。主人は祖父にカタツムリを差し上げるつもりでした。さて、太郎冠者はどうして山伏がカタツムリだと思い込んだのでしょうか。

巧みな言葉で証拠を見せていく山伏はみごとですね。三人が浮かれながら謡う謡は「雨も風も吹かぬに、出ぎ釜打ち割ろう」。「天気がいいのに殻から出てこなければ、殻を打ち割るよ」の意味です。

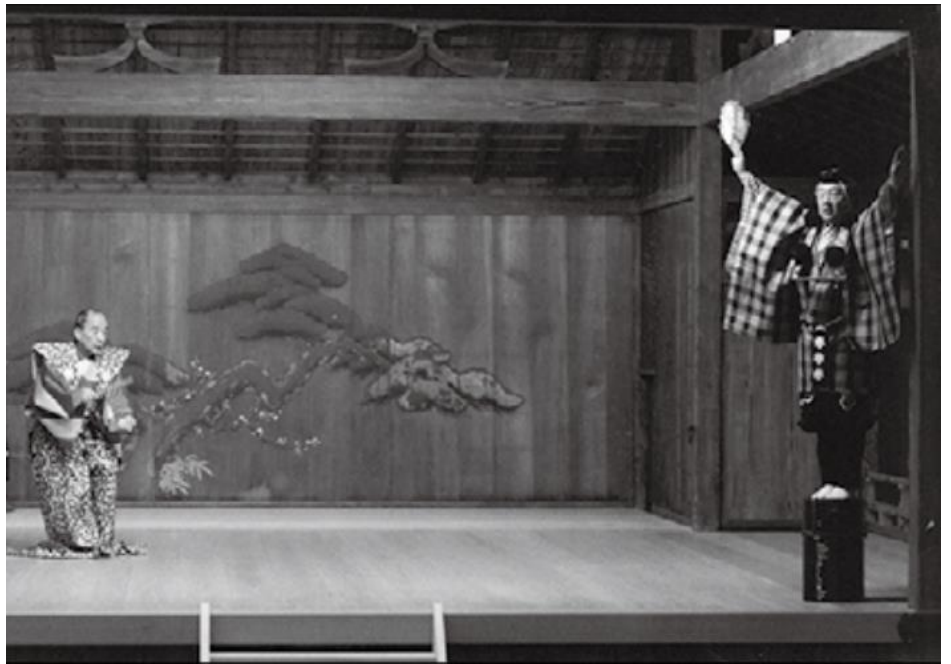
演目

[柿山伏] かきやまぶし

おおみねさん かつらぎさん お
大峰山と葛城山で修行を終えれば
かりの山伏が、出羽の羽黒山へ帰る
途中のこと。お腹がすいてふと見ると、
みごとな柿の木があります。山伏は
かってのぼ勝手に木に登って柿を食べはじめまし
た。そこへやってきた柿の木の持ち
主。上から飛んできた柿の種に気づい
て見上げると、なんと山伏が大切な柿
を盗み食いしているではありませんか。
さてどうやって懲らしめてやろうか。あれ
はカラスに違いないと、カラスの鳴きま
ねをさせます。一生懸命に鳴きまねを
する山伏。次はサル、次はトビ。柿の
持ち主は「トビなら飛びそうなものだ」
とはやし立てます。山伏も決心をして、
高い木のうえから「ヒー、ヨロ、ヨロ」と
飛んだのですが。

[解説]

修行を積んだ山伏は、普通の人では持ち得ない能力
(法力)を持っていると考えられていました。そんな山伏で



も、お腹がすくと人のものを盗み食いするものなのです。トビ
のまねをして柿の木から落ちてしまった山伏。柿の持ち主
に、「家まで背負って行って治療しろ」とおどめますが、結局
は背中から振り落とされ、法力の無いことまであからさまにな
ってしまいました。

面と道具



[道具] どうぐ

ほとんどが象徴的なものですが、な
かでも、かざらおけ桶というウルシぬ塗りの桶
をよく使います。酒樽、床几こしかけ(腰掛)、
茶壺ちやつぼ、そしてときには樹木じゆもくの役も果た
します。また、桶の蓋は酒盛りのときの
盃さかずきや茶碗ちやわんにもなります。

[面] おもて

能では面をつけることが大半です。狂言は直面ひためんと言って、素顔すがおが大部分
ですが、「鬼」「動植物」(狐、狸、猿など)「老人・老女」(ろうじよ)
「幽霊」(ゆうれい)などでは面を使用することがあります。

能舞台を見る

能舞台は、四本の柱に支えられた四角な舞台と、橋掛りと呼ばれる廊下のような部分からできています。他の演劇のように観客との間に幕がありません。

①橋掛り

演者が出入りする通路であると同時に、舞台の延長としての機能を持つ

②シテ柱

シテ（主役）がこの柱の近くに立つことが多い

③鏡板

老松が大きく描かれている。神が松にやど宿り、その神に芸能を捧げると伝えられる

④切戸口

地謡や後見の出入りに使う

⑤笛柱

笛方がこの近くに座る

⑥ワキ柱

ワキ（主役の相手）がこの柱のそばに居ることが多い

⑦目付柱

能面をつけ視野が狭くなった演者の目じるしとなる

⑧一ノ松・二ノ松・三ノ松

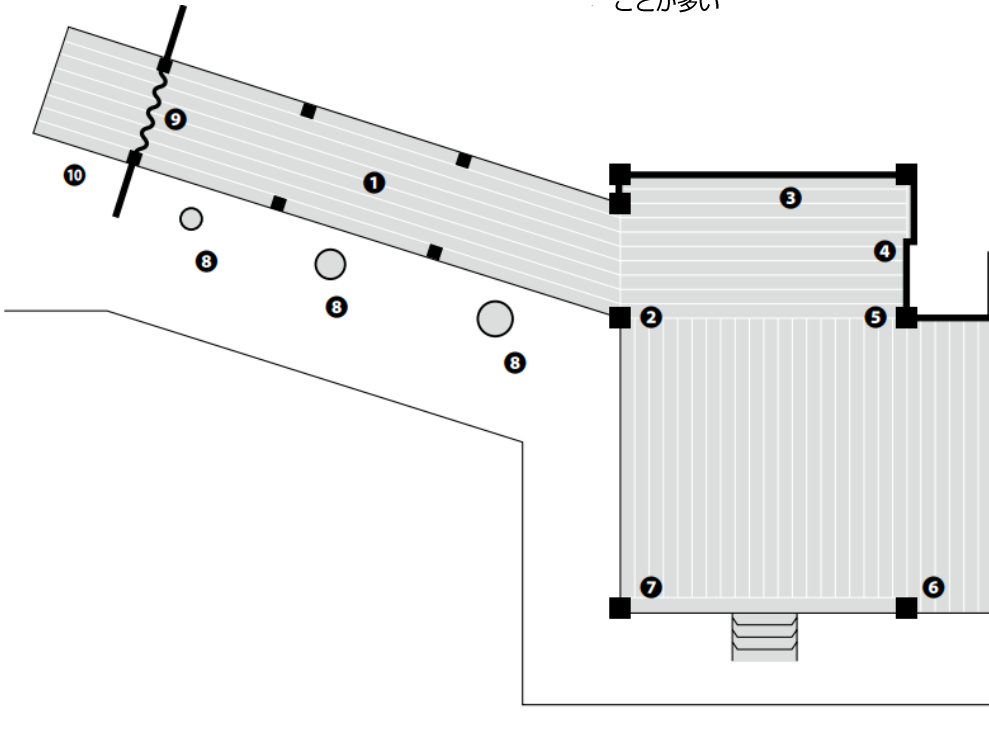
舞台に近いほうから一ノ松・二ノ松・三ノ松といい、大きさも順に小さくして遠近感を出している

⑨揚幕

演者の出入りするときに揚げる幕。普段は閉じている

⑩鏡の間

揚幕の奥にある大きな鏡を備えた部屋。演者が最終的な身支度をする



団体紹介

大蔵流狂言の山本家は、室町時代に始まった狂言を今に伝える家柄で、東京を中心に活動しています。江戸時代には幕府の正式な儀式の場で狂言を勤めていたので、格調高く、気魄に満ちた芸風を持っています。

メモ欄

「国際音楽の日」について

知ってますか？

10月1日は

「国際音楽の日」です。

1977年にユネスコの要請で設立された国際音楽評議会という会議で、翌年の1978年から毎年10月1日を、世界の人々が音楽を通じてお互いに仲良くなり交流を深めていくために「国際音楽の日」とすることにしました。

日本では、1994年から毎年10月1日を「国際音楽の日」と定めています。